

「人々はしるしを欲しがる」という小標題が掲げられます。この箇所の並行記事はマルコ8;11-12とルカ11;29-32です。マタイとルカは共通点が多く、共にQ資料に依存していることが分かります。ところが、マルコではヨナや人の子だけでなく、ニネベの人々や南の国の女王も登場しません。ただイエスが嘆いて「しるし」を全面的に否定するだけです。おそらくこのマルコが原初的な記事だったのでしょう。ここに登場する「しるし」とは謂わば「保障」のことです。イエスに関心を寄せているようで、実は彼を直接的に信頼せず、自分とイエスの間に保障を置き、それによって評価しようというわけです。それはイエスとの主体的な出会いを避け、安全な保障を媒介にして相手を見るということなのです。

このマルコの伝承はQ資料グループによって改変され拡大されました。Qはイエスを迫り来る終末の裁きを語る教師と理解し、さらに近い将来に裁きを行う人の子として出現することが期待されました。ですから、この段階で伝承は裁きへの警告として作り替えられたのです。つまり、今の時代にあってイエスの言葉が終末のしるしであり、聞かない人々は滅びに定められているということです。それはちょうどヨナの言葉が裁きの警告であったのと同じ道程を辿っています。ヨナの求めたことは「悔い改め」でした。この言葉は「戻る・Uターンする」という意味です。いつも裁きの警告のもとに戻れということです。イエスの言葉と働きに立ち帰るべき時と場を見いださなければ、彼らはヨナの言葉を聞いて悔い改めたニネベの人々、つまり、イスラエルが蔑視していた異教徒にも劣るものになるということです。

マタイはマルコのオリジナル資料ではなく、このQ資料の方を選んだのです。そして、ヨナが三日三晩大魚の腹の中にいたように、人の子も大地の中に

三日間留まると述べました。ラビの伝説ではヨナはこの三日間に地獄の門にまで至ったといひます。それは死の経験です。イエスも同様に三日間の受難を経験します。三日三晩という限定された時間は、イエスの死には終わりがあるということ、ヨナが再び地上へ戻ったようにイエスの復活が示されるようマタイは編集したのです。そして、Qの「しるし」をイエスの死と復活という「しるし」へと変更したのです。それは一貫して旧約の語る「裁き」を回避するための「戻り」ではなく、「十字架と復活」という愛への「戻り」

なのです。

才能や地位や財産、妬みや卑しさや損得勘定やらにこころを奪われて見えなくなっている命の本来の姿を、見えるようにしてくれるのが信仰でしょう。ですから信仰とは、これまで心奪われていたものにもはや価値を置かないという訣別でもあるのです。しかし、一度訣別すると決めたからには二度と元には戻らないかといえ、なかなかそうもいかないのがわたしたちです。やっぱり繰り返してそれらに心奪われて逆戻りしてしまうのです。知識ならば豊かにし、経験ならば深め、技術ならばそれを磨くのが課題でしょうが、信仰の課題とは逆戻りしないことではないでしょうか。信仰には前進という課題はありません。ただ逆戻りしないという課題があるだけなのです。

イエスは「わたしのもとへ来なさい」(11;28)と戻れることを待ち続けられる方であることを覚えて願うのです。